

2021年度 総括案

代表代理 事務局長 沼田 栗実

2021年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症と上手に付き合いながらの活動になりました。前年度に引き続き、コロナ禍前と同じように活動することは難しい一年でしたが、感染予防対策を行いながら、出来ることを考え、実行してきたと思います。事業ごとに振り返り総括していきたいと思います。

2021年度は、以下の3つの短期目標を掲げ事業を行ってきました。

- ① HIV/エイズを取り巻くさまざまな相談の受け皿となる他団体の相談先をまとめた、情報提供先の資料を作成し、各事業での資料配布に向けた準備を行う。
- ② スタッフの学習機会と捉え、勉強会を積極的に実施し、参加を促していくことで、知識のアップデート及びスキルアップを図る。
- ③ 認定NPO法人格取得に向けて、会員数の拡大に努める。

電話相談事業は、助成金を得て短期目標①にあたるHIV/エイズを取り巻くさまざまな相談の受け皿となる他団体の相談先をまとめた、情報提供先の資料を作成に尽力しました。日頃の電話相談の中で、相談の主訴の背景には、自身のセクシュアリティが絡んでいたり、もしくは、相手とのパワーバランスが関係していたり、保険や就労の問題が関わっていたり…様々な背景があります。その中で、当会の電話相談は「HIV/エイズ」に関するところを丁寧に相談に乗っていますが、それは相談者の一部の悩み・心配でしかありません。勇気を持って相談してくれた方を多角的にサポートできるようにと、行政機関をはじめHIV領域以外のNGOとつながりを持つと、時間がない中で情報資料を作成しました。これをきっかけに、相談の輪が広がり、道内のHIV予防啓発とHIV陽性者支援につながることを願っています。

今年度は、PEP（曝露後予防内服）やPrEP（曝露前予防内服）についての相談も複数ありました。ここ2～3年でよく耳にする最新の情報でも、基本の相談姿勢であるリスクアセスメントをしっかりと、相談者に寄り添った相談を心がけ、冷静に相談員が対応してくれています。コロナ禍前に比べると相談件数は減っていますが、電話がならない日はないことを考えると、とても大切な事業です。

また、2021年度は、長い実績のある当会の電話相談事業において、「開設当初からの相談内容の変化などをまとめて、オンデマンド配信の研修で動画発表をして欲しい」と依頼を受けました。引越しや助成金事業等をこなしながらの時間がない中で、現相談員が可能な限りの歴代電話相談員に声掛けし、電話相談を始めるきっかけや想いと現在の電話相談のことを共有する機会を作ってくれました。現相談員にとっては、電話相談を始めた大切な当会の想

いを引き継ぎ、これからも繋いでいくためにとてもいい機会になりましたし、電話相談員を離れても電話相談員の一員として先輩方と今の状況を共有できたことは、とても有意義なことだと思っています。

そして、当会の事業ではありませんが、札幌市の「LGBTに関する電話相談（以下LGBT相談）」に、引き続き相談員として関わっているスタッフがいます。様々な所属から集まっているこのLGBT相談は、当会の電話相談とは異なる難しさや大変さがあると思います。その中で、札幌市の担当者から「このLGBT相談に対しての意見交換がしたい」と、当会の相談員に声を掛けていただいたのは、当会の相談員に信頼を持ってくれており、相談の姿勢が評価されているからと感じています。当会の電話相談員として恥じない相談員に、とても感謝しています。

講演事業は、コロナ禍で外部講師などを招くことに躊躇される学校や施設が多い中、過去に当会の講演を経験されたことのある先生から依頼がありました。小学生、中学生、高校生の年代と一緒に登校している放課後デイサービス(フリースクール)でのエイズ出前授業は、当会でも初めての経験と思います。講演もしばらく依頼がなかったため、久しぶりの活動となりましたが、さまざまな背景がある生徒の皆さんに合わせた講演内容を、講演スタッフ全員で考えた時間は、とても有意義な時間だったと思います。

パワーポイントを一切使わず、パネルを使い、生徒の声を一つ一つ大切にしながら進める、生徒参加型の講演は、対面だからこそできる当会のオリジナリティだと思います。

どんな講演でも時間配分やスマートに講演をすることが美德とされることが多いと思いますが、バタついて、人間味のある生の言葉で、聞いてくれている相手に確認しながら進める講演を、これからも大切にしていってほしいと思います。

また、「HIV陽性者のリアルを伝える」の講演は、中期目標につながっています。最近では、HIV陽性者の長期療養時代に、施設の受け入れ拒否などの話も耳にするようになりました。コロナ禍ではなかなか難しい状況ですが、講演事業ができるようになったら積極的に広報していきましょう。

アウトリーチ事業は、一番多くのスタッフが関われる事業ですが、引き続きコロナ禍におけるまん延防止等重点措置や緊急事態宣言の発令により、中止になったイベントも多く、活動が制限され活動の場が少なかったと思います。

実際に、参加予定のイベントの中止や急きょオンライン配信のみになる中で、「どうやって伝えていくか」を考え、外(アウト)へ手を伸ばして(リーチ)情報発信に取り組んでくれました。スタッフからの提案を受け、ブログをもっと身近に感じ、楽しく読んでもらうために「スタッフブログ」も始めましたし、ラジオでの情報発信やさっぽろレインボープライドの公式マガジンでの情報発信など、様々なツールを利用しながら、HIV/エイズについての情報を発信しています。

アウトリーチ事業は、スタッフの「やりたい!」「発信したい!」を実現できる事業です。来年度は、より多くスタッフのモチベーションをくみ取り、一緒に情報発信していきたいと

思います。

ななかまどPJは、北海道に暮らす HIV 陽性者が「今よりもっと元気になるために必要としていること」を共に考え、形にしていくことを目的に、面談ルーム「くれば一緒」と陽性者交流会を実施しています。くれば一緒の問い合わせ・利用はありませんでしたが、陽性者交流会は、対面開催を2回、オンライン開催を1回行うことができました。陽性者交流会開催にあたっては、新型コロナウイルスの感染状況や政府の対策を常に考慮しながら、スタッフが適宜、開催と中止の判断を検討し適切に動いてくれました。広大な北海道に住む HIV 陽性者の社会資源としてニーズがあり、他に代わりのないたいへん重要な事業です。次年度（2022年度）は、以前も企画していましたが実現できなかった地方開催も予定しています。引き続き、安全な開催について考えていきましょう。

全体を通して、2021年度も新型コロナウイルス感染症の流行が及ぼした事業および活動への影響は大きかったと思います。それを前向きに捉え短期目標②を掲げましたが、活動が制限される中で、上記のように多くの活動にスタッフの皆さんが参加してくれました。そのため勉強会を積極的に企画し実施することは難しかったかもしれませんが、スタッフそれぞれが、活動の中で色々なことを吸収していたと思います。

厚労省の研究班の事業への協力など、ここには記載できなかった事業もたくさんありますが、2021年度のスタッフの頑張りに大変感謝いたします。

今後も引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮しながらの活動が続くことが考えられます。その中で、それぞれのスタッフが関われる形で、活動を支えてくださっています。年齢も職業もセクシュアリティもさまざまなスタッフが関わってくれていることで、一つの事柄も、多様な視点で考えることが出来る、これは、当会の財産だと思います。密を避けるため、対面での話し合いが難しい状況ではありますが、それぞれの経験や感受性を共有するような機会を持ち、切磋琢磨していきたいと思います。

2021年度も助成金だけではなく、資金面で継続的に応援してくださる賛助会員の皆様、たくさんの寄附をいただいた企業様・個人の皆様、たくさんの方々に支えられ、事業を全うすることができました。本当にありがとうございました。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。活動が制限されることが、もう少しだけ続くと思いますが、スタッフそれぞれが「ワクワクすること」を考えながら、2022年度も出来ることから始めて行きましょう。